友史会 2025 年 2 月講座例会

特別陳列「二上山にはじまりを求めてー旧石器時代を知る、探る、考えるー」

講演会

令和 7 年 2 月 16 日　13:00～16:30　 橿原考古学研究所講堂

光石鳴巳　橿考研企画学芸部長「奈良の旧石器研究５０年」
小原俊行　奈良文化財研究所「東日本への瀬戸内技法の波及について」

【感想文　２月例会だより】

２月 16 日（日)、橿考研講堂にて「二上山にはじまりを求めて」の特別陳列にちなみ、旧石器時代についての講演が行われた。

始めに光石鳴巳先生による「奈良県の旧石器研究 50 年」と題したお話があった。奈良に住む私たちにとり、古墳や寺社と違い県内の旧石器遺跡と言われても首をかしげる方が多いのではないだろうか？　私自身、二上山のサヌカイトが石器に使われた、ということ以外は浮かんでこない。先生も旧石器時代研究を著しくマイナーな分野とおっしゃっていた。1949 年の群馬県の岩宿遺跡発見で日本の旧石器研究は始まったそうである。「旧石器時代を知る」のパートでは日本の最古級の石器時代遺跡は後期旧石器時代で、3 万 8 千年から 1 万 6 千年前と言う。鹿児島湾の大規模噴火の火山灰（AT）の層がその前半期と後半期区分の指標になるそうだ。鹿児島の火山灰の降灰範囲が青森まで及ぶことに驚く。そうした地層に放射性炭素年代法や年輪年代法を重ねて時代を決めていく。近畿は残念ながら旧石器遺跡は少なく、関東、九州に多いと言う。石器の見方としては割れ方を見るのだそうだ。割れた所に加工がほどこされているのか、自然に割れたか、叩いて割ったか。石器はただ破片を尖らせてナイフを作ったと簡単に考えていた私にとり、瀬戸内技法工程という破片からナイフ形石器をいかに効率的にいくつもの剥片を取って作り出すか、という工程は驚きだった。次の「探る」というパートになると二上山北麓遺跡群の調査の話、奈良盆地という産地と離れた旧石器遺跡の話が展開される。そして「考える」と言うパートでは石器の接合の話になる。破片から単に元の形を推測するために接合するのではない。組み立ててバラす。その繰り返しで石器作りを追体験し、観察でわからなかった意味がわかるそうだ。つまり、どうやって剥離していったかを知る。隙間は他の用途に使った材なのか？など考えていく。ただしそれは究極の 3 次元パズル。かなりの困難で記録も大変だという。翠鳥園遺跡の接合資料を何気なく見てしまった自分を反省すると同時にもう一度見てみたいと思わされた。そして旧石器の材の石、形の分布から交流や文化の広がりも見えてくる。旧石器研究の深さの一端に触れた思いだった。

次の講演は「東日本への瀬戸内技法の波及」と題して奈良文化財研究所の小原俊行氏によるものだった。最初の講演でまだ消化不良だった「瀬戸内技法」について詳しく説明していただくことができた。石を第一工程で大型剥片を作り出し、第二工程で企画的な翼状剥片を量産し、第三工程で整形加工をする。整形加工では鋸歯縁加工のものもある。そして北陸、関東平野、野尻湖等の遺跡や出土石器の写真をたくさん提示していただき、より理解を深めることができた。

毎回、特別展にちなんだ講演に参加すると展示への理解がより深まる。そしてもう一度展示をゆっくり見たくなる。これまでほとんど知らなかった旧石器研究の深さの一端に触れたように思えた。

奈良市　新島弓美子